

アップルファームさみず、サン・ファーム、青木農園 合同公開確認会 (2015年8月17日・18日) 監査報告

パルシステム生活協同組合連合会新農業委員会

パルシステム東京は8月17日(月)・18日(火)の2日間、長野県にある産直産地、アップルファームさみず、サン・ファーム、青木農園 合同公開確認会を開催しました。「エコ・りんご」を対象品目として、新エコ・チャレンジ基準による栽培の工夫、品質向上や物流の共同化の取り組みを確認しました。

■生産者、組合員など105名が参加しました

「アップルファームさみず、サン・ファーム、青木農園 合同公開確認会」は、長野県上水内郡飯綱町の「飯綱町民会館」を会場に、パルシステム東京の主催で開催されました。当日は天候にも恵まれ、生産者や会員生協の組合員など、総勢105名が参加しました。アップルファームさみずは2002年、サン・ファームと青木農園は2004年にそれぞれ公開確認会を行っており、各産地とも2回目の開催となりました。

アップルファームさみずは1973年「アップルさみず新流会」として長野県北部の上水内郡三水村(現飯綱町)に設立され、1977年にパルシステム東京の前身である江戸川生協との取引が始まりました。その後生協の規模拡大にともない、取引高と会員生産者が増加したことにより、2002年に農業生産法人有限会社アップルファームさみずとなりました。現在は飯綱町とその周辺の26名の生産者で構成されています。栽培面積は約36ha。主にりんごの生産と販売で、また、アップルファームさみずの加工商品の原料としても使用されています。

サン・ファームは、1992年に結成され、長野市及び中野市在住の6軒7名の生産者で構成されています。りんご900a、ぶどう60a、桃12aを栽培しています。

青木農園は、長野県北部の山ノ内町に位置し、1970年にパルシステム東京の前身であるあけぼの生協との取引が始まりました。現在生産者は8名で、りんご290a、ぶどう約470aを栽培しています。圃場は標高350m~700mの間に点在し、干ばつ対策として全ての圃場にコンピューター制御のスプリンクラーが設置されており、定期的に散水が行なわれています。

■収穫したりんごの鮮度を保つ工夫

1日目は監査人によって、サン・ファーム代表：堀口貞夫氏、青木農園代表：青木賢一氏の圃場と集荷場、及び事前監査として帳票の確認が行なわれました。

堀口氏の集荷場の床はコンクリートと土間が半分ずつになっており、りんごの鮮度が保たれるよう工夫がされていました。青木氏の圃場は元々は水田で、そこに今から45年前にりんごの木を植えて圃場にしたとのこと。山の斜面にあり平らなところはほとんどなく剪定等の農作業は他の圃場よりも重労働であることがわかりました。

その後、宿舎に移動し帳票の監査を行ないました。

3産地とも新エコ・チャレンジ基準の栽培を満たしていることを確認しました。



▲帳票について質問する監査人

■安全でおいしいりんごを組合員に届けるために

2日目は、一般参加者が合流し、参加者全員でアップルファームさみず山下一樹氏と島田洋一氏の圃場、そして2014年に竣工した出荷場を視察しました。山下氏の圃場はわい化栽培を採用している所を視察しました。わい化栽培とは接ぎ木した穂木の成長を押さえる性質を持った台木を利用して高さを小さくし、植え付けの密度を上げる栽培方法です。木が大きく高くないため、脚立を使用することがなく、作業の効率化ができる利点があります。ただし、根が大きく張らないため乾燥に弱く、4日雨が降らないと散水して乾燥を防止しているとの事でした。島田氏の圃場は、よくりんごがなっているように見えたのですが、灰星病が多かったとのこと。

灰星病はカビによる病気で農薬を使わないで対処する場合、感染した葉や実を圃場から持ち出して焼却する必要があります。りんごの生産の過酷さを垣間見た思いでした。出荷場の視察では、昨年竣工した際に導入された光センサー選果機を運転して選果の様子を再現していただきました。これは果物に光を当てて、



▲光センサー選果機の説明

その透過率から糖度や酸度、内部の品質を計測する機械です。また出荷場には、ジーピーエスの出荷基準が写真で貼られており、参加者は品質向上の取組を実際に確認することができました。

■北信濃りんご会議を設立し、相互協力体制を図る

昼食の後、各産地の取組紹介が行なわれました。

紹介に先立ち、パルシステム東京野々山理恵子理事長より「生産者と利用する組合員が対等な立場で考えて進めていく二者認証は画期的な取り組みで、他の生協などでも確認しあうという点で広まりを見せている。今回の確認会で、未来に向けて何をすべきかの確認ができるようにしたいと思う。」と挨拶が行なわれました。

産地側からは、アップルファームさみず山下勲夫代表が「社会や地域の状況が変わっていく中で、地域を巻き込んで頑張りたいと思います。」サン・ファーム代表堀口氏が「前回の公開確認会で指摘を受け、各生産者の倉庫や、農機具などを管理し始めたところ色々な事を気づくことができ、仲間意識も強まったと思います。そういった事もあり、公開確認会が行われるのは喜ばしく思います。」青木農園代表青木氏が「昨年からは生産者が8名に増えました。前回(2004年)の公開確認会のことを思い出しました。その時は、やってよかった、自分のためになったと思いました。今回もきっとそんな思いができると思います。」と、それぞれ確認会への抱負を述べました。

産地の取組報告が青木農園、サン・ファーム、アップルファームさみずの順で行なわれました。

青木農園の青木代表からは、イノシシやニホンシカ、クマなどが作物を食い荒らす被害が問題になっていること、環境保全型農業に関わる有益な情報を共有しながら技術の向上を図るため、毎月1日に内部会議を行っていること、新エコ・チャレンジ基準に関しては他の2産地の協力(学習会)を得ながら内容を確認し実行しており、栽培計画に関しては、8名の生産者で検討していくことが報告されました。

また、研修生の受け入れや加工品の取り組み、パルシステム東京の職員や組合員との交流拡大を図ってきたいと、今後の抱負も述べられました。

サン・ファームの堀口代表からは、生産者の中に35歳~45歳の若手が4名いるので、10年先を見据えた立派なビジョンができると期待していると述べられました。また、2013年に産地の内部監査を実施し2014年にパルシステムの新エコ・チャレンジ基準の取り組みを開始したこと、産地独自の点検表を作成し、各生産者が毎年提出するようにすること、りんごの出荷の際には何処の圃場で収穫したものか分かる仕組みがあることが報告されました。そして、若手を育成し10年先を見据えたビジョンの作成と運用を行っていくことが、今後の課題であることも述べられました。

アップルファームさみずの山下一樹氏からは、前回の公開確認会をきっかけにこれまで各生産者で違いがあった栽培計画を統一して記録するようになったこと、りんごの生産量は600tで主にふじ(50%)・つがる・しなのスイートが栽培されていること、元々特別栽培基準で栽培していた上に、現在は自主基準(パルシステムよりも厳しい)を設けて栽培しているため新エコ・チャレンジ基準の対応はスムーズにできたことが報告、また産地の中長期ビジョン(課題、組織、生産・販売)についても述べられました。

また、この3産地で構成している「北信濃りんご会議」の活動について報告がありました。

活動内容としては、特別栽培に対応した病害虫対策の勉強会の相互参加や共同開催、生産者間の交流と情報交換を行なっていること、北信濃ブランドによる商品企画(「エコ・りんごセット」やギフト商品、加工品の開発)、2014年度から始まった首都圏方面へ出荷する物流の一本化があります。今まで3産地がそれぞれ運送会社を手配して出荷していたものを、アップルファームさみずの出荷場に持ち込み一括で出荷することで、物流費を削減することができました。

■3産地のこれからの期待

質疑応答の後、監査人からの所見報告がありました。

アップルファームさみずには、「パルシステムの基準より更に厳しい基準で作っていることを、もっと多くの組合員に知ってもらいたい。その取り組みの1つとして産地交流の機会も増やして欲しい。」サン・ファームには、「書類が多いことに驚いた。また、作業場が清潔で冷蔵庫もしっかり管理されていた。農薬や資材など保管方法に工夫がなされていた。これからも、安心して安全な美味しいりんごを私たちに届けて欲しい。」そして、青木農園には、「パルシステムとの付き合いが45年ということで、結びつきが非常に強く感じた。栽培方法に関してもパルシステムとの関係が始まる以前から、減農薬で栽培されていたのがわかった。大きな問題はないが、圃場や作業場などの整理整頓は改善の余地があると思う。書類の把握は代表だけでなくみんなが把握したほうがよい。」とそれぞれの産地について所見が述べられました。また、「作業場の天井の高さが様々で光の加減が違う。目で見て点検する上で見え方が違ってきてしまうのではと思う。見え方が統一できるような工夫をお願いしたい。」「この2日間で生産者の皆さんが、細かく点検・作業をしているのがわか

った。また、生産者同士のつながりの強さを感じることができた。パルシステムにとってこの3産地は非常に大きな財産である。」「今回の公開確認会に参加して、改めて問題ないことが確認できた。これからも美味しいりんごを作っていて欲しい。」と更なる改善や取組への期待、生産者への激励も述べられました。

最後に、株式会社ジーピーエス工藤友明事業本部長は「中身が濃い公開確認会でした。このような公開確認会は初めてなので監査する方も大変だったと思います。今回、3産地合同で行うことにより地域づくりという面が良く見えました。まもなく新エコ・チャレンジ基準で栽培されたりんごの出荷が始まるという意味でもこの公開確認会は良かったと思います。」とまとめました。

産地受け止めとして、「指摘していただいたものを全て受け止め、更なる改善に勤めていきたいと思います。」(青木農園:青木代表)

「交流の受け入れ態勢はできているので、交流にまた来てください。」(サン・ファーム:堀口代表)「安全・安心・おいしいりんご作るために3産地は努力を惜しみません。しかし、最近の異常気象は半端ではありません。特別栽培基準以上の農薬削減をしていくことは非常に大変ですが、北信濃の3産地は協力しながらレベルの高い産地として頑張っていきます。」(アップルファームさみず)と、それぞれ挨拶がありました。

最後に、長らくアップルファームさみずの代表を務められた山下勲氏が8月末日付で退任し、山下一樹氏が代表に就任する旨報告がなされ、公開確認会は終了しました。



▲所見を述べる監査人



▲パルシステム東京 野々山理恵子理事長



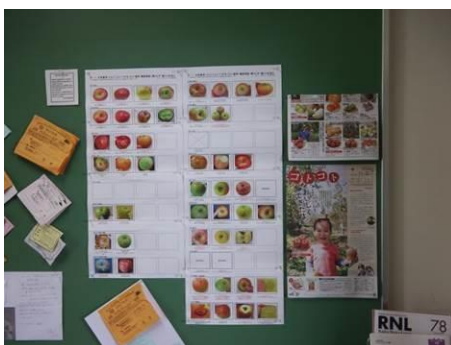
▲アップルファームさみず 山下一樹専務



▲サン・ファーム 堀口貞夫代表



▲青木農園 青木賢一代表



▲出荷場の壁に貼られている出荷基準



▲わい化栽培の圃場

アップルファームさみず、サン・ファーム、青木農園 合同公開確認会 所見のまとめ

1、産地の理念・事業内容について

<アップルファームさみず>

- ・「人と自然の共生をめざし、環境にできるだけ負荷をかけない農業を進める」という理念を実践している。これはパルシステムの考え方と合致している。
- ・自然との共生や北信濃の風土を生かした栽培や次世代につなぐ農業を目指している。

<サン・ファーム>

- ・化学合成農薬の使用を抑え、有機肥料を使用し、安全で自然環境にやさしい栽培を図っている。パルシステムの考え方と合致している。
- ・品質向上に重点を置き、環境負荷を与えない取り組みや組合員に信頼される農業をめざしている。

<青木農園>

- ・1970年代のあけぼの生協との取引開始以来の理念を受け継ぎ、地域発展に貢献しつつ環境保全型農業を営み続けている。パルシステムの考え方と合致している。
- ・あけぼの生協時代の1970年から長年に渡り取引があり、パルシステムの理念を理解し、実践されている。元々減農薬栽培に組み込みをしていたのでパルシステムの方針に合致している。

2、産地の組織や意思決定について

<アップルファームさみず>

- ・会員は毎月1~2回の頻度で行うミーティングにおいて、お互いの栽培状況を確認し合う。栽培期間が終わった冬期には、1年間の栽培の振り返りを兼ねた勉強会を行っている。
- ・前回の公開確認会を踏まえて担当者への責任明確化、生産者ごとの登録や圃場の公図、住宅地図は非常に解かり易く、会員や事務局が把握できることや情報の開示では有効に使えると感じた。また、内部での取り決めも総会会議録を通じて確認できた。
- ・26名の生産者がおり、取締役・監査役にもあっている。女性部・青年部もある。

<サン・ファーム>

- ・毎年総会において、産地ビジョンが確認、共有されている。
- ・役割や責任関係等について、帳票類から確認できた。総会資料や堀口代表からの聞き取りで確認した。こと細かく規約など決められており、産地の組織としては、評価できる。ただし、組織としての動きが堀口さんに偏っていないか、また、他の生産者との意識共有がどの程度できているか気になった。
- ・7名の生産者が代表、副代表、生産管理、監査役、各取引先業務等の役割となっている。

<青木農園>

- ・毎月1回、必ず全会員でミーティングを行い、会員間の情報交換に努めている。
- ・組織内部の取り決めについては確認できませんでしたが、現在の人数になってまだ日が浅いこと、新会員加入など、まだ手につけられない状況でしたので、今後取り組んでいただけたらと思います。
- ・代表と各生産者の役割分担は明確となっており、Fnet入力等は代表が実施している。毎月1日の13時から内部会議を行い、各生産者と情報共有を行っている。生産者台帳などにより、生産者の圃場内容等が明確となっている。生産者台帳が最新のものではないので、随時変更されるべき。

3、産地の栽培基準について

<アップルファームさみず>

- ・長野県の「信州の環境にやさしい農産物（特別栽培）」認証を取得し、化学合成農薬、化学肥料の使用は慣行栽培の2分の1以下となっている。
- ・取引先の中で、栽培基準が一番厳しいところに合わせて、実質的には化学合成農薬は6割減で栽培されている。
- ・りんごは全て特別栽培なので、新エコ・チャレンジ基準の対応はスムーズにできた。内部規定にて栽培管理責任者が確認している。文書化されたものは確認しなかったが、会員の学習会を通じて意識と知識を高めている。
- ・新エコ・チャレンジ基準の開始以前から適合内容での栽培がなされていたので、大きな変更はなし。すべて特裁基準に則った栽培。土壌分析に基づいた施肥設計を年間最低1回は行っている。果樹試験場と連携し、防除に関する勉強会と圃場点検を毎年実施。

<サン・ファーム>

- ・化学合成農薬と化学肥料の使用が長野県の慣行栽培の2分の1以下という、パルシステムの新エコ・チャレ

ンジ基準に基づき栽培されている。長野県の「信州の環境にやさしい農産物認証」を2016年度に会員全員が取得する予定である。

- ・産地の栽培基準はエコ・チャレンジ栽培確認書にて確認した。栽培管理については、文書ではなかったが栽培管理表や計画書にて概要は理解できた。
- ・収穫から出荷までのチェック体制が入念に行われており、品質向上と管理に生産者全員が留意している。
- ・新エコ・チャレンジ基準に基づいて栽培することを確認。6名の確認印。除草剤・土壌くん蒸剤・削減目標農薬の不使用。県の特別栽培以上の栽培内容。

<青木農園>

- ・「信州の環境にやさしい農産物」認証を取得し、減農薬から新エコ・チャレンジ基準に沿った栽培に取り組んでいる。
- ・代表が作成した防除暦に基づき、各自が散布、施肥を行う。防除暦記録シートに各自が実施日を記載する。
- ・確認帳票類が少なく、具体的な確認や文書などはなかったため、青木代表の聞き取りで確認した。新基準への理解は、あるものの各生産者の栽培基準がまだ統一されておらず、今後栽培研修も含めて改善することのお話があった。
- ・基準書については、青木氏が作成し、各生産者は日付を入れるだけでOKと簡素化されている。
- ・8名の生産者が、それぞれ役割をもってあたっている。(代表、代表代理、栽培指導、会計、監査)

4、栽培の実践について

<アップルファームさみず>

- ・年に2回、新規就労者も含む全会員で圃場を点検・確認し合っている。
- ・比較的短期間で高い収量を見込める、わい化栽培に積極的に取り組んでいる。現在、45aに800本のリンゴを育てている。種類はふじ、しなのスイート、しなのドルチェ、つがる、夏あかり。
- ・ある種類のダニ防除のため、ダニの天敵が増えるよう、りんごの木の下草を適度な高さで保つようしている。ダニの防除は状況を見ながら行い、害虫については発生しなければ農薬散布をしないなど、農薬散布の削減に努めている。
- ・組織を挙げて土づくりや減農薬に取り組んでいるため、農薬の回数や化学肥料の使用量等についても問題なく栽培されている。記録も確認した。また、内部監査においても客観的に実施しており、責任も明確であった。農薬の保管も管理していた。駐車スペースをつかった作業場のようなので、風よけや日が直接当たらない工夫も必要と感じた。自宅から圃場が近い生産者が多く、より管理しやすいのではないかと感じた。
- ・土壌分析により、圃場ごとに必要な成分を過不足なく補い、肥料は基本的に有機質のものを使用。除草剤は使用せず草刈りで対応。コンフューザーの設置を推進。農薬等の資材置き場は2重扉で厳重に管理されていることを作業場の視察で確認した。

<サン・ファーム>

- ・化学合成農薬と化学肥料の使用が長野県の慣行栽培の2分の1以下という、パルスシステムの新エコ・チャレンジ基準に基づき栽培されている。
- ・防除計画は2月に立てる。防除暦は表に記録した後、台帳に転載する。
- ・全会員で各生産者の圃場を年に2回点検する。
- ・元肥は全会員で共同購入する。農薬の購入方法、施肥のやり方は各自にゆだねられている。
- ・新基準にそった栽培を実践。農薬は在庫を持たず、肥料は有機質のものを施肥。堀口代表の圃場、作業場を視察させていただいたが、管理の行き届いた圃場、整理整頓された作業場、倉庫は他の生産者の手本となるものであった。多くの生産者にはできないことを実践したことは、素晴らしいと思う。
- ・チェックリスト(日々の点検リスト)を使用するなど工夫されている。特裁の推進と新エコへの切り替えのため、肥料や農薬の検討・研究に熱心な取り組みがなされている。

<青木農園>

- ・化学合成農薬と化学肥料の使用を、長野県の慣行栽培の2分の1以下に抑えている。
- ・計画的な防除に努め、月ごとや状況判断に基づいた適切な農薬散布量になるよう努めている。
- ・作業場では、農薬ホース、軽油などがリング用コンテナと同じ空間に置かれていた。この点について改善を求めたい。
- ・除草しながら病虫害のチェックを行っている。全圃場にコンピューター制御のスプリンクラーが設置されている。出荷責任票が不揃いで整理されていないので、誰が見てもわかりやすいようにファイリングするとよい。
- ・防除暦は詳細がわかりやすいフォーマットであるが、鉛筆書きであった。書き換えられないようにボールペン等で記入したほうが良いのではないかと。

5. 表示・出荷について

<アップルファームさみず>

- ・集荷場には光センサー選果機が導入され、糖度・蜜および褐変の有無を計測・探知して、りんごを適切に選別している。
- ・使い捨てでないリースコンテナの使用など、環境への負荷を減らしている。
- ・圃場ごとの生産物の差異や変化がわかるようにデータ化され、次年度対応にも使用できる。昨年からの収穫物をさみずに集約・一括配送の仕組みを開始し、費用削減となった。

<サン・ファーム>

- ・出荷場では道具類を正しく保管するためのチェックリストが活用され、商品カードの保管・使用法などにも工夫があった。
- ・出荷場の床はコンクリートと土が半分ずつになっており、りんごの水分保持に努めていた。
- ・選果は約3回と丁寧に実施されている。
- ・生産者カードを袋に入れてから、りんごを詰めて間違えないようにしている。

<青木農園>

- ・出荷作業場では、りんご用コンテナの脇に農薬用ホースや軽油などが置かれていた。りんごへの混入を避けるため、それらを作業場の外に区別して保管するよう、改善を求める。
- ・生産者ごとの出荷伝票があるとわかりやすい。(数量記録とファイリングの改善) 加工品のコンテナの近くに農薬のバケツが置かれていた。収穫物の周辺に肥料などがあると混入の可能性ありと思われるので、改善されるとよい。

6. その他

<アップルファームさみず>

- ・高齢の会員などの作業の代行を行えるよう、農作業委託の価格基準が取り決められている。会員の高齢化が進んでいるとの話だったが、このような仕組みがあることで、全体的な生産性を維持しつつ、ゆるやかに世代交代を行うことができるので、非常に良い取り組みだと思われた。
- ・産地のものを生かした女性部の昼食は、地産地消のモデル。交流には欠かせないものだと思う。会員の学習会は品質向上には欠かせず、積極的に計画している。各生産者が結果の確認をし、次年度の計画に反映していると思われる。古い施設は今後どうするのか。片づけが進んでいない様子なので、再利用を早期検討していただきたい。環境に対する意識は高いものと思われる。世代交代を積極的に進めて、組織ビジョンに取り組んでいるのは、素晴らしいと感じた。課題解決にも早期対応ができるものと感じた。
- ・地元中学生の職業体験や養護学校・NPO 法人との交流で収穫交流を実施。土壌分析を実施し、結果を活用している。若手生産者のチャレンジにもフォロー体制が取られている。特別栽培であることを活かして、付加価値を付けた加工品の商品開発にも取り組んでいる。病虫害対策等のため、有識者を呼んで勉強会を実施し、長野県果樹研究会に参加するなど、来年度の防除対策も含めて研究を続けている。「北信濃りんご会議」としての連携と相互協力体制。
- ・土壌分析に基づいて、畑ごとに土づくりをしている。生きた土壌を保つため、除草剤を使わず、機械除草する。
- ・味本位で、全品種無袋栽培・摘果講習会を行って高品質生産を目指している。

<サン・ファーム>

- ・1995年以來取引のある、「ビオ・ゲミューズの会」会員との産地交流を毎年行っている(20名程度)。
- ・パルシステム組合員との産地交流についても歓迎している。
- ・会員の圃場のうち、20ヶ所について行った土壌分析の結果から、水はけの良さやバランスの良い施肥状態が報告された。
- ・周辺産地からの農薬飛散対策は、隣接圃場の防除時期を把握しリストを作成および防除ネットを設置すること、高齢化による耕作放棄圃場を集団化して栽培地とし、隣接圃場からの距離を保つことを確認した。
- ・りんご狩り交流を実施している。土壌分析を実施し、結果を活用している。様々な研究を続けられており、圃場管理も素晴らしいと感じた。若手の育成も含め、今後ますますのご発展を応援したいと思う。

<青木農園>

- ・近隣生産者が高齢のため手放した圃場を取得し、新たなりんごの木を定植する予定である。長く栽培地であった、このような圃場が栽培放棄地にならずに済み、かつ、地域の景観の保全にもつながっていくことは、非常に良いことである。代表の前向きな姿勢を素晴らしいと思う。
- ・圃場を開放して子供たちに土に触れて欲しいと毎年ファームステイを企画している。いかに組合員や消費者とつながりを大切にしているかがうかがえた。細かい対策はまだ行われていないが、集まった会員は、各自の理想があり、青木代表との出会いがあった。技術や経験は皆豊富であり、青木代表の人柄に触れて仲間になったと伺った。先代から受け継いだ農業を新しい観点で独自の道を選んだ生産者に是非がんばってもらいたい。

- ・多種の品種を生産することで、りんごの変形を防ぐなどの工夫がなされている。農法研究会やさみずの勉強会に参加し、新エコ・チャレンジ基準にも取り組んでいる。生産者カードのメッセージを各生産者にフィードバックし、モチベーションに繋がっている。パルシステム埼玉と毎年 11 月にりんご狩りを実施、10 年以上継続している。長野県の里親制度により、研修生の育成を行っている。

監査人名簿

1	パルシステム東京	組合員	岡村 佳子
2	パルシステム東京	組合員	小林 弓子
3	パルシステム東京	組合員	増子 雅代
4	パルシステム神奈川ゆめコープ	組合員	小島 信江
5	パルシステム山梨	理事	福田 志津子
6	パルシステム生産者・消費者協議会	果樹部会	鳥居 啓宣
7	株式会社ジーピーエス	事業本部長	工藤 友明

※ 監査シートの自由記載欄に記入いただいた内容を下記に掲載しました。

- ・農業未経験ですが、作付から出荷までのおよそ 1 年間をこの公開確認会で勉強させていただきました。「農薬、化学肥料の使用は良くないから、できることなら使っていない食べ物を食べたい。」という気持ちでおりました。生産者の生の声を聞きますと、虫の発生などで木や果実を守るために農薬を使わざるを得ない、という事実を知りました。やみくもに農薬を使っているわけではなく、必要最低限に許可を得た農薬を適量に計画的に使用していることがわかりました。農薬をたくさん使うと木に負担がかかり弱ってしまう、環境にもよくなく、農薬購入にもお金がかかります。減農薬でりんごを作ることにに関して、手作業での木の剪定、摘花、摘果、草刈りなど非常に労力と時間がかかり、また農薬を使うタイミングが悪くてりんごに黒星病がでてしまうこと、天候に左右されること、苦労が多くつらいことが多い、高齢化で全ての作業が大変、報われたいといった生産者の声を伺いました。生産者から消費者に対して伝えたいこととして、農薬を減らし、安全、安心でおいしいりんごを食べてもらいたいという気持ちで苦労が多い栽培を続けています。見た目の悪さでクレームがくることもあるが、出荷基準を満たし、味には問題ないので理解いただきたいとの声もありました。今後もこだわりのりんごを作り続けていきたいです。そして、私たち消費者が理解を持って買い支えていきたいです。
- ・「生産者カード」「組合員の声」は記入されると生産者に届くようになっていて励みになるそうです。きちんと保存されていたので、是非是非、生産者カードの裏に書いてください。私もそうしたいと思いました。今回は“りんご”でしたが、エコ・チャレンジやコア・フードで作物を栽培するのは、とても大変なことというのがわかりました。
- ・私達の健康は、第一次産業の生産者皆さんに支えられています。誇りを持って続けていきたいです。私は以前、集団給食に携わっていました。食材である野菜や果物や肉、加工品などがどのようにして作られているのだろうか？そのようなことに興味を持ち、いつか現場を見たり経験してみたいと思っていました。しかし、出産と子育てで忘れてしまっていたのですが、思い出させていただいたのがこの企画でした。いきなり、監査人という役目をいただきました。事前、事後レポートは普段物書きをしない私には大変でしたが、自分がやってみようと思ったことなので、悩みながらも色々感じ考え楽しむことができました。

* 編集の都合で、加筆・修正している箇所があります。